世界名作劇場

プリンセス
小公女セーラ

『こわされた魔法』

第38話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第38話『こわされた魔法』）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジュシー
ガートルード
モーリー

ジェームス（ラム・ダス）
エミリー（人形）
シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・表（朝）

点燈夫が、ガス灯の灯を消して去って行く――

2

同・屋根裏部屋（朝）

天窓に――雀たちの鳴く声。

×　　×　　×

ベッドで眼を醒ましたセーラ、半身起上り、すっかり元気を取り戻した様子で、心地よげに両手を拡げ、ノビをする。アクビした口をはっと押えて、呟く――

セーラ「さ、ベッキーを起してあげなくては……」

セーラ、ベッド脇の壁をノックする――

3

同・ベッキーの部屋

ベッドで、新しい毛布をかけて眠っているベッキー、もぞもぞする。

――またノックの音。

ガバとはね起きるベッキー――

ベッキー「は、はい、ただいま！」

隣りから、セーラの声が続く――

セーラの声「ベッキー、朝ご飯よ」

ベッキー、はっと気がつき、壁に答える。

ベッキー「はい、お嬢様、すぐ伺いますです」

ベッキー、改めて毛布を見て抱きしめる。

ベッキー「まだ、魔法は消えてなかったんだわ」

4

同・屋根裏部屋

着換えたセーラが、昨夜の儘に飾られたテーブルで、残

り皿を整え直している。

ノックの音と共に、毛布を抱えてニコニコ入って来るベッキー――

ベッキー「お早うございます、お嬢様」

セーラ「お早う、ベッキー」

ベッキー「矢っ張り、今日も、魔法は残っててくれましたですねえ」

セーラ「(微笑)そうよ、ベッキー……でも、どうしたの、毛布なんか抱えて……それはあなたの分のよ」

ベッキー「はい……ですが、お嬢様……お話だと、昼間は、魔法は消えてるんでございましょ」

セーラ「ええ……この間、院長先生とモリーさんに調べられた時、ここにはなにも残っていなかったのよ」

ベッキー「矢っ張り、魔法使いが片付けておいてくれたんでございますよ……そうだとしたら、これも一緒にしておかなくては……」

ベッキー、抱えた毛布を、セーラのベッドに置きに行く

――――

セーラ「（微笑）まあ……さ、お食事よ」

ベッキー「はい、昨夜はおなかが一杯で、随分残してしまったです」

ベッキー、来て、セーラと卓につく。

セーラ「火が消えてスープは冷たいままよ」

ベッキー「なあに、食物が冷たいぐらい馴れてますです」

セーラ「まあ……」

二人、微笑って、残りのパンとスープを食べはじめる―

――――

ベッキー「お嬢様……素敵でございますねえ魔法って」

セーラ「え……」

ベッキー「私、生れてから今日まで、これ程倖せな気分になった事、はじめてです」

セーラ「まあ……」

ベッキー「あんな温い毛布で眠れたのも初めてですし、こんなおいしいもの頂けたのも初めて。私、その魔法使いさんを探して、お礼を云わないと申訳ないような気がして……」

セーラ「(微笑) いいのよ、ベッキー……きっとその魔法使いさんには、私達が心から感謝している事が、伝わっていると思うわ」

ベッキー「まあ、そうでしょうか」

セーラ「だって、それが魔法ですもの」

二人、思わず笑い合う。

5 同・裏屋根の上

そっと天窓から窺っているラム・ダス。

微笑を浮べる——

6 同・屋根裏部屋

食事を終り、立上るセーラとベッキー。

セーラ「さ、モリーさんたちが起きないうちに、台所の支度をしておかなくては」

ベッキー「はい、お嬢様……」

二人、ドアに行く——振返って、テーブルに向って胸で十字を切るベッキー。

ベッキー「どうか、いつまでも魔法が続きますように……」

セーラ「（微笑）まあ……」

二人、部屋を出て行く——

音もなく天窓が開き、飛降りて来るラム・ダス、微笑でドアを見たが、天窓の召使い二人に合図する——

7 同・台所

元気一杯で働いているセーラとベッキー。

入口から、モリーとジェームスが、のっそりと入って来る――

セーラ「あ、お早うございます。モリーさんにジェームスさん」

ベッキー「お早うございまーす！」

疑わし気に二人を見て顔を見合せるモリーとジェームス――

セーラは気づかずに仕事を続け、ベッキーも鼻唄で働いている――

二人を窺って、そっと囁き合うモリーとジェームス――

モリー「見たかい、セーラのあの顔色のよさ」

ジェームス「ああ、病み上りで、ろくに食べてなかったって顔色じゃねえな」

モリー「この所、栄養満点の子どもみたいにツヤツヤして来てさ。ベッキーなんて？　生意気に肥って来たんじゃないかえ」

ジェームス「矢っ張り、俺達のいねえ間に、残り物でもタラ腹食って

やがったんだぜ」

二人、戸棚に行くと、開け、皿を取り出す。そっくり残っている肉パイ。

ジェームス「おかしいな。全部残ってるぜ」

モリー「まあ……」

ジェームス「判らねえ……一体、あの二人、どこで、なに食ってやがるんだろう」

8　同・廊下

アメリアが、振鈴を鳴らす――

9　同・地下の食堂

テーブルの皿に、パンを配っているセーラと、スープを

用意しているベッキー。
ロッティ、アーメンガード以下の女生徒たちと、ラビニア、ジェシー、ガートルードたちが入って来る。
ロッティ「お早う、セーラ・ママ！」
セーラ「あ、お早う、ロッティ」
アーメンガード「お早う、セーラ、元気？」
セーラ「有難う、アーメンガード、とても元気よ」
× × ×
離れて、顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード――
ジェシー「ほんと、セーラったら、随分元気になっちゃったみたいね」
ガートルード「不思議だわ……院長先生が、メイド代りのあの人に、私たちよりいい食事させる筈ないのに」
ラビニア「（冷笑）フン、もしかしたら、セーラお得意の、つもりのせいかもよ」

ジェシー「つもり？」

ラビニア「ほら、さんざんやってたでしょ。プリンセスになったつもり……あれと同じで、なにか食べたつもりにでもなってるのよ」

ガートルード「プッ。可哀想……」

冷笑する三人――入って来るミンチンとアメリアに気づく。

ラビニア「お早うございます。院長先生！」

女生徒達「お早うございます……」

ミンチン「お早う、皆さん……」

ミンチン、ふっとセーラに視線を向ける。

セーラ「（明るく）お早うございます。院長先生……」

ミンチン「そんな事はどうでもよろしい……用事を終えたら、さっさと台所へお戻り！」

セーラ「はい、院長先生……」

セーラ、気づかうベッキーと一緒に、平静に出て行く
――
顔を見合せて冷笑するラビニアたち――

10 同・地下の作業場

明るく大鍋を洗っているセーラと、手伝うベッキー――

11 同・院長室

入って来るミンチンとアメリア――
ミンチン、不快気に吐き捨てる。
ミンチン「あの子……いやに元気そうね」
アメリア「あの子って……？」
ミンチン「決ってるでしょう、セーラに」

アメリア「あ、ああ……」
ミンチン「お医者にかけてやったのも忘れて、血色ばかりよくなって」
アメリア「ほんとに、元気そうになって、なによりでしたわ……ひと頃は、おなかを空かせて、今にも倒れそうに見えましたのに」
ミンチン「（ジロリ）おなかを空かせて、倒れそうですって？」
アメリア「いえ、あの、そう見えただけで」
ミンチン「お黙り……セーラには、充分に食べさせています。おなかを空かせてるだの、倒れそうだの、世間態の悪い事、口にするんじゃありません！」
アメリア「す、すみません、お姉様……」
ミンチン「モリーとジェームスに、聞く事があります……呼んでおいで」
アメリア「は、はい、お姉様……」

12 同・台所

洗い終った皿、食器を片付けているセーラとベッキー
――
その傍で、モリーとジェームスが、ひと休みしている
――
そこへ顔を出すアメリア――
アメリア「あ、モリー、ジェームス……院長先生がお呼びよ」
モリー「はい、ただいま」
アメリア、去る――
顔を見合せるモリーとジェームス――

13 同・院長室

腕を組んで歩き廻っているミンチン。

ノックの音――に振返る。

ミンチン「お入り……」

ドアが開き、モリーとジェームスが、おずおずと入って来る。

モリー「お呼びだそうで……」

ミンチン「そう……実は、セーラの事で、聞きたい事があってね」

顔を見合せるモリーとジェームス――

ミンチン「あの子、この頃馬鹿に元気そうになったけど、まさか、必要以上の食事を与えているのではないでしょうね」

モリー「とんでもない、院長先生……」

ジェームス「その事でしたら、儂らも奇妙に思ってる事があるんで」

ミンチン「なんですって？」

14

同・廊下

アメリアが、授業開始の振鈴を鳴らす。

15

同・院長室

ミンチンに訴えるモリーとジェームス。

モリー「と云う訳で、セーラ達がどこでつまみ食いしてるか、今だに突きとめられないんでございますよ」

ミンチン「成程……判りました……矢張り、セーラの行動に充分注意する必要があるようです。モリー、ジェームス、お前たちにやって貰いたい事があります」

モリー「は、はい、院長先生……」

16

同・台所

掃除をしているセーラとベッキー――

入って来るジェームス――

ジェームス「さあさあ、いつまでそんな掃除に時間食ってるんだ……
セーラ、買出しの時間だぞ」

セーラ「はい、ジェームスさん……」

17 同・表

買物籠を抱えたセーラが、使用人階段を上って来ると、
街路へ――
そのあとから、そっと姿を現わすモリー、
見え隠れにセーラを尾けはじめる――

18 コベント・ガーデンの風景

――焚火をしている男たち。

19

その一角

野菜の詰った買物籠を提げたピーターが、リンゴをかじりながら、セーラと来る。

そのセーラの手にも、ピーターの渡したらしいリンゴが握られている――

ピーター「いやあ、煙突掃除に化けて、お嬢さんの屋根裏部屋にたどりついたまではいいけど、とに角鼻の穴ン中までススだらけで、洗っても洗っても、くしゃみがとまるのに一週間もかかりましたよ」

セーラ「(微笑) まあ、ピーター………」

× × ×

離れて、愕然と尾けるモリー

× × ×

立停るピーターとセーラ。

ピーター「じゃ、お嬢さん、今日はここで……ぼくに出来る事があ
ったら、なんでも云いつけて下さいね」
セーラ「ええ、有難うピーター」

×　　×　　×

尾けて来たモリー、そっととって返す――

（中　C　M）

20

ミンチン女学院・院長室

愕然と、デスクの椅子から立上るミンチン――傍に、アメリア。

ミンチン「なんですって？………あのピーターが煙突掃除でこの学院へ………？」

ミンチンの前に、モリーが帰って来ている――

モリー「はい、院長先生………なにしろ本人のピーターが喋ったんでございますから、間違いはありませんです………そう云えば、あの時………」

21

フラッシュ（37話より）

ミンチン女学院の使用人階段の下で、威丈高なモリーの前に、それぞれ道具を担いだジムと、背中にくっついて

窺う顔中まっ黒にススを塗ったピーター——売り込むジムと、あしらうモリーの口パクをバックに、モリーの声がかぶる。

モリーの声「売り込みの煙突掃除のうしろにくっついてた相棒が……」

22 同・院長室

モリー「……あのピーターだったに、相違ありませんです。はい」

茫然と顔を見合せるミンチンとアメリア。

モリー「それに、セーラは、ピーターからリンゴなんぞを貰っておりましたですから、きっと今迄も、いろいろ食物を貰っていたに違いございません」

ミンチン「な、なんと云う事を……」

モリー「院長先生……実は、私どもも奇妙に思ってたんでございますよ……あの市場にお使いに出す時に限って、セーラが嬉

しそうな様子だったんでございますから」
ミンチン「まあ……」
モリー「その上、決って時間が長くかかって……それもこれも、あのピーターが原因だったんでございますよ」
ミンチン「アメリア……！」
アメリア「は、はい、お姉様……」
ミンチン「セーラの部屋を調べます。来るんです！」
アメリア「お、お姉様……」

23

同・三階廊下

眠っているシーザー――
階段を足早に上って来るミンチンと、慌ててついて来る
アメリア――
シーザー、ミンチンに尻ッ尾を踏まれ、ギャァッと飛上

る
構わず屋根裏への階段へ急ぐミンチンと追うアメリア
――
見送って、唸るシーザー、口惜しまぎれにジュータンを
かきむしる――

24 同・表

買物籠を抱えて帰って来るセーラ――

25 同・台所

セーラから買物籠を受取り、改めるジェームス――傍に
モリー。
ジェームス「フン、随分時間がかかったじゃねえか」

セーラ「すみません……」

モリー「お前が、どこで道草くってたか位、ちゃんとお見通しなんだからね」

はっと見るセーラと、一方に心配そうなベッキー――

モリー「さあさあ、ボヤボヤしてないで、洗濯物をとり込むんだよ！」

セーラ「はい、モリーさん……」

26 同・裏庭

洗濯物のシーツを取込むセーラとベッキー――

27 同・屋根裏部屋

隅のつづらを開けて探しているミンチンと――傍でオロオロしているアメリア。

ミンチン「いいですか、アメリア……あのセーラは、ピーターを使って、この屋根裏部屋に、私たちの知らない世界を作ろうとしていたんです……そんな事を許す訳に行きますか」

アメリア「で、でも、お姉様……」

ミンチン「いいえ、私の推理に間違いはない筈です！」

ミンチン、ふと振返り、つっ立っているアメリアに気がつく――

ミンチン「アメリア！……ボンヤリ立ってないで、早く証拠を探し出すんです！」

アメリア「は、はい、お姉様……」

アメリア、仕方なく床にはうと、セーラのベッドの下をのぞく――その儘移動し、暖炉の方に来る。

その時、暖炉の傍の壁穴から、顔を出すメルの一家――次々に出て来て、怪訝そうにアメリアを見上げる。

視線を移し、はじめてメル一家に気づくアメリア、飛び

上って悲鳴をあげる。

アメリア「キャァ！」

驚いて振向くミンチンに、アメリア、悲鳴と共に飛びつく――

アメリア「キャァ！」

ミンチン「ア、アメリア！」

アメリア、ミンチンにすがり失神する。

ミンチン「ア、アメリア！……アメリア！」

慌てて抱きとめるミンチンを――メルの一家がキョトンと見上げている。

28 同・表全景（夜）

クリスフォード家の居間の窓から、灯りが洩れて見える――

×　×　×

隣りのミンチン学院の窓灯りが、次々に消えて行く——

29　同・地下の作業場（夜）

洗濯物にアイロンを掛けているセーラとベッキー——

モリーとジェームスが、戸口に顔をのぞかせる——

ジェームス「じゃ、あとを頼んだぜ」

モリー「火の元に気をつけるんだよ」

セーラ「はい。おやすみなさい、モリーさんにジェームスさん」

ベッキー「おやすみなさい」

ジェームスとモリー、顔を見合せて、意味あり気にニヤりと笑うと、去る——

30　同・台所（夜）

手燭を手に戻って来るセーラとベッキー、ほっと吐息をつく――

ベッキー「やれやれ、やっと片付きましたですね」

セーラ「ええ……さ、灯りを消すわ」

セーラ、灯を消す――手燭の灯りの中に浮ぶセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「え……?」

ベッキー「あのォ……お部屋の魔法、今夜も続いているでしょうか」

セーラ「(微笑)そうね……判らないけど、私は、きっと続いているような気がするわ」

ベッキー「わあ……お嬢様、私、とても愉しみなんでございます。……今夜は、どんな魔法のご馳走が頂けるかって……」

セーラ「(微笑)まあ……じゃ、早速確かめに行きましょうよ」

ベッキー「はい、お嬢様……ほんと云うと、私、さっきから、おな

かがペコペコで、グウグウ鳴ってるんでございます」

セーラ「まあ、私もよ！」

二人、忍び笑いを残して、出て行く――

31

同・三階の廊下

眠っているシーザー――

セーラとベッキーが、階段を上って来る。

シーザー、眼をさまし、ニャアと鳴くとセーラの足許にすり寄る――

セーラ「シイッ……また明日ね、シーザー……おやすみ」

セーラとベッキー、屋根裏部屋へのドアに消えて行く――

廊下に坐り、ニャアと見送るシーザー。

× × ×

ふと、ミンチンの居室のドアが、細く開き、ミンチンが覗く――セーラたちのあとを見送ると、そっと廊下に出て来て、室内に親指で「来い」と招く。
そのミンチンの居室から、そっと出て来るモリーとジェームス――ミンチン、二人を従えると、屋根裏部屋へのドアに近づく。
唸って近寄るシーザー――
ミンチン「シッ…………！」
ジェームスが、シーザーを蹴飛ばす。
素っ飛んで逃げるシーザー――
ミンチン、モリー、ジェームス、屋根裏部屋のドアに消える――

×　　×　　×

ふと、ラビニアの部屋のドアが細く開き、ラビニアが、そっと見送る――

32

同・屋根裏部屋（夜）

ドアが開き、手燭を手にしたセーラとベッキーが入る

——赤々と燃える暖炉には、ピカピカの銅の湯沸しが沸とうし——美しいテーブル掛けを掛けた机の上には、銀食器に並んだ様々の料理——ベッドには、可愛い柄の毛布——壁にはきれいな壁掛け——全て前にも増した豪華な支度が整えられている。

セーラ「（微笑）ほらね、ベッキー……」

ベッキー、うっとりと見廻す——

ベッキー「す、すてきですわ、お嬢様……私たち、ほんとうに、魔法の世界に帰って来てるんですわねえ」

セーラ「そうよ、みんな魔法使いさんからの贈物なのよ……さ、ベッキー、感謝して頂きましょうよ」

ベッキー「は、はい、お嬢様……」
　二人、机を挟んで、椅子と、折畳み椅子に坐り、ナプキンをあてる。
ベッキー「お嬢様……なんだか、私たち、ベルサイユ宮殿に招待されたみたいでございますね」
セーラ「そうよ……さ、今夜はきっと、ポタージュ・フロランティーヌかなにかよ」
　セーラ、ポタージュの銀容器の蓋をとる。
　もうもうと昇る湯気――
セーラ「ほらね」
ベッキー「うわあ、おいしそう！」
　その時、バタンとドアの音――
　セーラとベッキー、はっと振返る――
　×　　×　　×
　開いたドア口に――ミンチンと、モリー、ジェームス

が、眼を見開いて立尽している。

茫然となるセーラとベッキー

セーラ「院長先生……」

その手から銀容器の蓋が落ち、音を立てて床に転がる

ミンチン、ゆっくりとセーラに近づく。

ミンチン「お、お前と云う娘は……なんて大胆な事を……」

はっとしたベッキー、夢中でセーラの前に土下座する。

ベッキー「お、お許し下さいまし……これはお嬢様がやった事じゃありません！みんな、すぐ消えるただの魔法なんでございます！」

ミンチン「お黙り！」

モリーが素早くベッキーの腕を掴んで横へ引摺り立てる。

ミンチン「セーラ……この仕掛けを誰がやったのか、私には判っています」

はっと見るセーラ――

ミンチン「全く。煙突掃除やピーターを使って、こんな事をさせていたなんて」

思わずセーラ、ベッキーと顔を見合せる。

ミンチン「フン、どうせ、あの連中に盗んで来させた品物でしょう。ジェームス、構わないから、全部取上げておしまい！」

ジェームス「へい、院長先生！」

ジェームス、片はしから壁掛けをはがし、毛布を丸め、ドア外へ放り投げる。

ミンチン「セーラ、お前には、もう、この屋根裏部屋に住ませる訳には行きません。さ、来るんです！」

33 同・三階廊下（夜）

屋根裏部屋への階段口から、エミリーと父の写真額だけ

を抱いたセーラの腕を引立てて出て来るモリーと、続くミンチン。

×　×　×

廊下で、茫然と見迎えるアメリア——

その前をモリーが、セーラを引立てて行く——

34　同・二階の廊下（夜）

降りて来るセーラと、モリー——

ラビニアが報せたらしく、ラビニア以下の女生徒たちが窺っている。

モリー「さ、来るんだよ！」

引立てられて降りて行くセーラ。

ロッティ「セーセーセーラ・ママ……（泣顔）」

アーメンガードも泣顔で見送る。

冷笑で見送るラビニア、ジェシー、ガートルードたち
——

35 同・裏手（夜）

ドアが開き、セーラを引立てて出て来るモリー、建物を廻り込む——
——例のジャンプのいた馬小屋が見える。

36 同・馬小屋の中（夜）

扉が開き、突き飛ばされてワラに倒れ込むセーラ——
モリー「フン、院長先生が、お前の寝倉は、今夜からそこだとさ！」
バタンと扉をしめて、モリー、去る。
エミリーと写真額を拾い上げるセーラ、じっとみつめる

セーラのN「私が移された新しい寝場所は、なんと、ジャンプがいた馬小屋だったのです……魔法は無惨に壊されたのでした……」

脣を嚙むセーラの眼に、見る間に屈辱の涙が溢れて来る

（第三十八話　終　）